

特集

普通科高校における「日本版デュアルシステム」の実施

濱崎 年久

要 約

二〇〇四年度「専門高校等における日本版デュアルシステム」が全国一五地域でスタートした。短期の就業体験とは違い、授業の一環として企業実習を一年間行い、単位を認定するシステムである。一五地域のなかで唯一の普通科高校における取り組みを紹介する。様々な課題の集中する学校。そのなかで懸命に生きる彼・彼女たちのトライ&チェンジ。デュアルシステムが目指すものは、単なる職業技術訓練だけではなく、自尊感情の育成と社会における自らの居場所の発見であると、われわれに教えてくれた。

一 デュアルシステムとは

「専門高校等における日本版デュアルシステム」は、教育・実務連結型の人材育成システムであり、若者の高い失業率・離職率、増加する無業者やフリーターなどの問題に対する政策として、文部科学大臣、厚生労働大臣、経済産業大臣、経済財政政策担当大臣の四大臣から出された「若者の自立・挑戦プラン」(二〇〇三年六月一〇日)

や内閣府の「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2003」(同年六月二七日)のなかで、導入の必要性が提起されている。デュアルシステムとはもともとドイツで行われてきた職業教育、訓練の制度で、次のようなものである。

大学入学資格(アビトゥア)を取得しない青少年は、一五ないし一六歳まで全日制の学校に通った後、なんらかの職業訓練を受けることになる。職業訓練生は特定の企業・職場と契約を結び、週に三日間は現場で訓練を受

け、二日間は公立の職業学校へ通って理論的・教養的な教育を受ける。職業訓練はほぼ三年間続き、修了試験に合格することによって終わる。

こうして大学へ進学しない子どもたちは職業の現場での「実践」、職業学校での「理論」という二本立ての職業訓練・教育を受け、職業資格を取得していく。

職業訓練の概要は法律によって規定されているが、実際の企業の訓練を指導・監督したり、助言を与えたり、必要に応じて企業と青少年を仲介したりするのがIHK（商工会議所）である。純然たる民間団体であるIHKが公立の職業学校と役割を分担しつつ青少年を職業の世界へと媒介する、これがドイツのデュアルシステムである。（前原健二「校長室を訪ねて ドイツの学校運営見聞記6（最終回）ドイツの職業訓練・教育の現状と課題」『教職研修』（教育開発研究所）二〇〇三年一〇月号、一〇一頁）

「日本版デュアルシステム」は、ドイツをはじめとする欧米諸国で行われているこうした職業教育を参考に、前述のような政策を具体化するものである。そして、文部科学省が（財）産業教育振興中央会に委託して設置した調査研究協力者会議から「専門高校等における『日本版デュアルシステム』の推進にむけて」（二〇〇四年二月

二〇日）が報告された。この報告を受けて、文部科学省から各都道府県に全国で一五の地域を、この「日本版デュアルシステム」の研究指定地域にする旨の通知が出された。大阪府立布施北高等学校が大阪府教育委員会を経て、この通知を受け取ったのは三月末のことである。

二 東大阪と布施北高校

布施北高校は、大阪府東大阪市荒本にある創立二八年の全日制普通科高校である。東大阪は東京都の大田区と並び、中小企業の町である。関西の地盤沈下が憂慮されているが、この地域は元気である。二〇〇六年に人工衛星「まいど1号」の打ち上げを目指す宇宙開発事業協同組合「宙（ソラ）」の存在はそれを象徴している。近年、大阪市営地下鉄の中央線と近鉄生駒線の相互乗り入れによって、大阪府庁のある中央線谷町四丁目から、学校の最寄り駅である荒本までの所要時間は約十五分程度と非常に便利になった。現在、駅名を「荒本」から「東大阪」に変えることが検討されているが、数年前から荒本駅の周辺は東大阪の中心として開発されてきた。二階建ての東大阪市庁舎、府立中央図書館、クリエイション・コア東大阪などが駅の北側にあり、外資系的大型販売店も

進出している。布施北高校はその荒本駅から徒歩約一分のところの位置しており、同和教育を推進している高校のなかでも、多くの課題をかかえて出発した学校である。近隣には、荒本人権文化センターを中心に様々な施設があり、これまでの部落解放運動の歴史を物語っている。

二〇〇四年度は一学年六クラス、入学時の募集定員は二四〇名である。課題の集中している生徒も多く、被差別部落、在日韓国・朝鮮籍の生徒やその家族を持つ者、中国をはじめとする海外からの帰国生・渡日生、生活保護世帯の生徒、学習・発達障害を伴う生徒など、ほかに多様な生徒たちがいる。小中学校時代から学力的に不振な生徒が多く、小学校二年頃からつまづき、授業から取り残されてきたというような生徒も少なくない。二〇〇四年度卒業生の進路は、四大・短大への進学者一名、専門学校進学一名、学校幹旋による就職六〇名、縁故就職・家業四名、公務員一名、残りの約八〇名については未定となっている。授業料の減免を受けている生徒は約半数であり、昨春秋に新聞報道にもあった国立教育政策研究所の「経済的な格差が学力格差を生み出している」とする分析の典型的な学校である。このほか年間の中途退学者数、生徒指導上の処分件数等、本校の生徒に集中

する課題を表象するデータはたくさんあるが、ここでは一人の生徒の作文を紹介して、本校の生徒が直面する現実や課題、そのなかで彼・彼女らがどう感じ、どう向き合おうとしているかを理解いただきたい。

次の作文を書いた生徒は、二〇〇四年度の卒業生で空手部に所属、同年度の大阪府教育委員会主催の人権作文コンクールに応募し、最優秀賞を受賞した。直接デュアルシステムの実践に参加したわけではないが、企業での就労から学び感じたことは、我々がデュアルシステムに取り組む上での原動力となっている。

三 「貧しさ」に向き合って見えてきたこと

「バイトの話、校長先生に聞いてみたらか」と、学年主任のK先生が廊下で声をかけてくださいました。その頃、私は、家庭の事情で授業料を払ってもらうことが出来ず、このままでは高校生活を続けることが出来なくなるのではないかと、不安が心の中で日一日と大きく膨らんでいました。校長先生にバイトの幹旋をしていただくなんてこと出来ないかと思ひ、校長先生に迷惑がかからないだろうかという心配で、どう答えたらいいかわからないでいる私でしたが、思い切ってお言葉に甘えることにしまし

た。

数日後、校長先生が見つけてくださったバイト先が、私のその後の生き方に大きな影響を与えてくださった、N社長のT精工だったのです。

バイト先が決まったことは本当に嬉しかったのですが、今度は、自分がすっかりしなければ会社にも迷惑をかけることになるのだというプレッシャーが大きくなっていきました。でも、バイトをさせてもらえるのは、すごくありがたい話であり、また、正直に言って、この話にすぎるしかない崖っぷちの状況に私はいたのです。失敗をしないように精一杯働くしかない私は、自分自身に言い聞かせました。

初出社して出会ったN社長は優しくて厳しい人、そんな印象でした。面接の後、これから私が迷惑をかけるであろう工員の方々を紹介していただくことになりました。その移動の途中、N社長に「校長先生の力なんか借りんと、自分の仕事ぐらい自分で見つけなあかんで」と言われてしまいました。自分も感じていたことだったので、恥ずかしさと悔しさがこみ上げてきました。その日の帰りに仕事用の安全靴を買っていただきました。

翌日から本格的に仕事をしました。合間に工作機械の掃除の仕方を教えていただき、忙しくしているうちにあ

つという間に昼食の時間になりました。誰がどこに座るかもちゃんと決まっていて、準備の仕方を教わりました。皆で同じ弁当をいただくのですが、先輩の工員さんたちは、「若いねんから、いっぱい食べなあかんで」と、すこしずつおかずを分けてくださるのです。

私は、学校では昼食を抜いています。(私だけではなく、昼食を食べない者や食べられない友達は多くいます。)工員さんのその心遣いを、すごく嬉しく思い、私はその場に溶け込んでいました。お昼の休憩が終わると、また違う機械に取り組みました。緊張してただ一生懸命に働いていたので、どの機械が難しくどの機械は扱いやすいといったことは感じませんでした。でも、ほめていただけたことはとても嬉しかったです。

社長さんや工員さんたちにかわいがっていただいて、夏休み中の約束の期間はあつという間に終わってしまいました。最後の日には、N社長が「高校を卒業したら、うちで働くか?」と言ってくださいました。今までの仕事の疲れを吹き飛ばすような、自分を誇りに思える言葉でした。

二期期になって、また高校生活が始まりました。これまでも何度か経済的な理由で退学を覚悟したことがありました。一山乗り越えようと、そのつど、いつ来れなくな

るのかわからない高校生活の一日一日を大切にしようと思いました。

私は空手道部に所属しています。三年生になってテコンドー大会に出場しました。その大会で私は銀メダルを取ることが出来ました。部活で毎日、ただ一生懸命に稽古をして来ましたが、自分がそんなに強くなっているとは気がつきませんでした。仕事も空手も、毎日、一生懸命に続けることで力がつくのだとわかりました。また、私にはこんな生き方しか出来ないこともわかりました。

そして、最近、昔から思っていたことを強く感じるころがあります。それは、強くなる事が出来れば人に優しくなれるということです。お世話になったN社長がそうです。

空手道部は、よく社会福祉施設でボランティア活動を行います。八月八日の日曜日にも障害者施設の若草園でイベントのお手伝いをしました。夏になると、あちこちの神社で夏祭りがあります。障害のある人も夏祭りに行きたいのですが、神社などは階段が多くて、車椅子では参加することが出来ないのです。そんな声を受けて、若草園では、園で夏祭りをするという企画をたてたのです。青年団は、みこしを持って来て、園の庭を練り歩きます。私たちはゲームを担当しました。若草園では何度もボラ

ンティアをさせていたでいるので、利用者の方々も顔見知りです。今年も「お兄ちゃん達、また来てくれてんね。ありがとう！」と言ってくれました。

今年の夏休みの仕事体験は、私にかけがえない感動を教えてくださいました。振り返ると、私にとっての人権を守ることは、経済的な貧しさとのたたかいのことだといえます。時には心をずたずたにされたり、不安と心配で明日のことも見えなくなることもあったけれど、逃げずに向き合ったことで、他の人には体験できない一生懸命に生きるこの意味を学べたように思います。また、様々な取り組みに参加することで、自分自身に対する誇りを感じられるようになりました。

これからも、一日一日の高校生活を大切にしたいと思っています。そして、自分の出来る範囲で精一杯のことをしていきます。そんな自分が、身近な人の役にたてばうれしいです。

四 普通高校が取り組む意義

二〇〇四年度の本校の教育方針は、自尊感情と生きる力、そして社会力の育成という二つの柱からなっていた。様々な観点から人権教育に積極的に取り組む、基本的な

生活習慣をつけさせる、学習において基礎基本を大事にする、様々な場面においてコミュニケーション能力を育成する、生活規律を守らせるといった取り組みを行っている。

職業教育は進路指導部を中心にこれまでも進められてきて、三年生の就職希望者の就職率は公立の高等学校のなかでは高い方であるが、日々の仕事で生徒指導に追われるなかで、勤労観の育成や職業意識の向上といった日常的な取り組みはあまりできてこなかった。しかしここ二、三年、三つの教育方針のもと、これまで教職員が中心的に取り組んできた生徒指導が実を結びつつあり、中学校の布施北高校に対する評価も変化してきた。そして徐々にではあるが、これまで指導できていなかった部分にも心を配ることができるようになってきた。

本校ではほとんどが就職希望者であり、学校幹旋によつて就職してがんばっている卒業生もいるが、離職する生徒もおり、卒業時のフリーターや無業者に加えて、「若者の自立・挑戦プラン」や「基本方針2003」にあるような問題を抱えた若者を多く社会へ送り出しているといわざるを得ない。専門高校や一部の高校を除けば、大阪の公立高校は地域ごとに九つの学区に分けて募集されるが、本校のような学校は各学区に二〜三校はあるので

はないだろうか。

「日本版デュアルシステム」の前には、専門高校等におけるという但し書きのようなものが付いている。おそらくドイツ版の職業学校という部分を「日本版」では専門高校と読み替えたのであろうが、「若者の自立・挑戦プラン」「基本方針2003」が問題と捉え、対処すべき若者は、本校のような普通科高校にも多く存在するのである。そうしたことから、本校がこの「専門高校等における日本版デュアルシステム」の研究に取り組む意義は非常に大きい。様々な課題を抱えた生徒たちの一人でも多くが、目的意識を持つて自らの進路を選択、決定し、よき社会人として地域社会に貢献していくことを願つてやまない。

大阪府では研究指定校募集に際し、工業高校をはじめとする専門高校はもとより普通科高校にも門戸を開き、広く府内の全高校を対象とし、東大阪地域を含めて四つの地域、八校が応募した。本校としても、この「日本版デュアルシステム」は教育方針である自尊感情・生きる力・社会力の育成という二本の柱に合致するものとして、応募を決定した。以降の経過は次のとおりである。

これまでの経過

二〇〇四年

3月末 府教育委員会へ日本版デュアルシステムの研究指
定の申請を行う

4月 将来構想委員会（カリキュラム検討委員会）のなか
にデュアルシステム部会設置

5月末 東京都立蔵前工業高校、六郷工科高校を訪問

6月中 東大阪市商工会議所への協力要請

東大阪市教育委員会への協力要請

東大阪市児童部への協力要請

7月初 東大阪地域（布施工業高校、布施北高校）が指定
を受ける

8月初 文部科学省でのプレゼンテーション

夏季インターンシップの実施。

8月30日 クリエイション・コア東大阪見学（二年生全員）

9月初 デュアルシステムプロジェクトチームの立ち上げ

10月中 来年度、二、三年生に対して移行期として企業実
習を行うことを決定（カリキュラムに学校設定科目

「企業実習Ⅰ」を開設）

11月18日 クリエイション・コア東大阪見学（一年生全員）

11月末 「企業実習Ⅰ」受講者締め切りおよび希望者に対
する面接を実施

12月初 「企業実習Ⅰ」受講者を決定。

二〇〇五年度入学生の教育課程の決定

12月中 実習企業選考会議、および第一回実習生事前指
導・履歴書作り

二〇〇五年

1月14日 大阪府認定のデュアルシステム研究指定校の会
議（布施工業高校）

1月中 職員会議で「全日実習案」が合意される

2月14日 デュアルシステム講演会

3月1日 東大阪地域連絡協議会（布施工業高校）

3月4日 秋田能代地域、和歌山地域への訪問

3月24日 協定書調印式

五 インターンシップの実践から得たもの

「これまでの経過」のなかで、夏季休業中のインター
ンシップを挙げた。かつてはインターンシップの取り組
みも行われていたが、ここ数年はできない状況であった。
ここ二～三年の変化のなかで可能になったことであると
思うが、今この一年を振り返って、この取り組みが非常
に大きな契機となったと思う。本校が「日本版デュアル
システム」の研究校に指定されたことにより、早急にイ
ンターンシップの経験を積んでおく必要が出てきた。進
路指導部はちょうど三年生の就職活動にあたっていたの

で一、二学年での取り組みとなった。残念ながら一年生の応募者はなかったが、二年生では七名の応募があり、工場、卸売り店、大型量販店、病院、図書館などに二、三日の職場体験に出かけることになった。二学年のN主任が担当となって、精力的に動き、インターンシップへの呼びかけ、事前指導、受け入れ先との事前協議、初日の引率、中日の訪問と様子伺い、生徒の日誌の点検と管理職への事後の報告、生徒に礼状や感想文を書かせる作業のほか、自ら終了後の挨拶に伺うなど、夏休みだからできたこととはいえ、横でその指導を見ていて感嘆するばかりであった。

以下はその努力の末、生徒から引き出した感想文の抜粋である。この感想文は一時間やそこらで書けたものではない。生徒と話し込み、書かせては話し、また書かせるといった具合に何度もキャッチボールをした上での成果である。生徒たちもよくその指導についてきた。そのことを理解したうえでお読みいただきたい。

六 インターンシップに参加した生徒の感想

(K病院・生徒S)

・私は自分の為にも人の為にも、役立つことをしたいと思

いました。

・しんどいのはわかっているけれど、それでもやりたいと思った。でも私が思っているでも実際やってみるわけでもないのです、インターンシップについて体験しようと思

いました。
・前に友達に「介護士は、おじいちゃんたちとおしゃべりして、身の周りの世話をするだけでいいもんな」と言われました。すごく腹が立ちました。そんな楽なものではないと思っていただけ、私が思っていたより大変だった。これは体験した人しかわからないと思います。

・おむつをかえてもらった人たちは、「ありがとう」って言うっていました。それに私たちなんか、おはなしや絵を書いたりしただけなのに、「ありがとう」って言うってくれました。この「ありがとう」の言葉は、ただ言っただけの言葉とちがって、心の底から言ってくれた「ありがとう」でした。私だけがそう思っているだけかもしれないけれど、その言葉がうれしくて、本当にうれしくて…。私はこの気持ちを感じさせるこの仕事をやるうと思いました。

(大阪府立中央図書館・生徒Y)

・私はいままでアルバイトもしたことがないので、これ

をきっかけに社会のきびしさなどいろいろなことが勉強できるのではないかなと思って、このインターンシップに参加しました。

・当日になって、ちゃんとできるかどうかという気持ちと緊張が一緒になっていました。

・私がいままでに思った図書館の仕事のイメージと違うなと思いました。

・私たちがやったインターンシップはあくまで経験で、実際社会に出たらインターンシップよりきびしいのだろうと思うと、もっともっと社会のいろんなことを経験したり、もっともっと人とかかわりかたも勉強しなければならぬと思いました。

・自分に合った仕事を見つけることが、一番大切なことだと思いました。

(K 工務所・生徒 K)

・中学校で職場体験をしましたが、そのときの真剣さや集中力がまったく違っていていると思いました。やっぱり高校生では、就職のことを考えるからすごく真剣になったと思います。

・午後から日差しが弱くなってきて、キズが見えなくなってきた、見逃してしまっていて注意されてしまいました。

ちょっと悔しかったです。

・最後は社長さんといろんなことをしゃべり、「あとの一年半を有意義にすごして下さい」と言ってくれて、本当にうれしかったです。また社長さんから、今度工作所のホームページを作るということで、二日の間に職場の人が撮ってくれた写真とホームページの資料をもらいました。これで忘れることのない思い出となりました。

・インターンシップで、めったに行けない職場を選んできたと思います。本当に勉強になったし、将来のためにもなった二日間だったと思います。

(K 商事・生徒 K)

・お客様満足をモットーにしており、誠意を持ってお客様に接しています。言葉遣いはもちろん、挨拶はいいねい、おじぎのしかたも場合によって違います。身だしなみは清潔感があり好感を持たれるかどうか重要になってきます。

・三日間行きましたが、どの日も、一年後就職へ進む私にとってよい経験となりました。

・レジの袋詰めというのに挑戦しました。本当にコレは挑戦というより試練といえるほどの作業でした。

・言葉にできないプレッシャーと緊張に、口がゆがんで涙ぐみそうになった。あれは本当につらかった。

・売り場の外の倉庫で指導役の店員さんが、中に商品がたぐさん入っている箱を運んでいるのをジーツと見ている時、その店員さんに言われました。「仕事というのは、ヒマができたなら探すもの」と今のポーツとしている私にごもつともなセリフで、さっと店員さんが箱を運んでいるのを手伝いました。あのセリフは今でも忘れません。いや忘れられないです。言い換えれば、「ヒマがあれば何かをしよう」っていうセリフにもなるので、私の過ごしている毎日、生活にもツボになる言葉です。私の過ごす一日はいつもダラダラしてて…。

・最後の帰りの際に「ここで働けるものなら、もっと働きたい」としみじみと思いました。

(KS産病院・生徒Y)

・朝の会議の場を借りて、職員の方たちに挨拶をしました。ものすごく緊張して声が小さかったのが情けなかったです。

・婦長さんのいろいろな仕事をカンペキにこなす姿に驚いたこと、いろいろな方たちの普段聞けないような話を聞いたこと、病院の裏側を知れたこと。よい経験でした。

七 デュアルシステムで何ができるか

初めてデュアルシステムの話を聞いた時には、正直なところ「企業で体験を積めば、そのなかから何か学び取ることがあるはずだ」という程度の認識しか持っていなかったように思う。しかし、インターシップに参加した生徒たちの感想文を読んで、想像以上のものを学びとってくるのが分かった。

インターシップに参加した生徒は、本校では地道にこつこつがんばっている生徒である。雨の日も寒い日も七時四〇分には登校している生徒がいる(一時間目の始業は八時三五分である)。文化祭や体育祭ではほとんどの生徒が帰宅してしまいうなか、教室の飾り付けや、後片付けなどを嫌がらずに引き受けてくれる生徒がいる。しかしこの生徒たちも中学校時代は不登校の経験があったり、いじめにあつた経験を持っていたり、自分をうまく表現することができずに教室の隅でかろうじて居場所を確保していたような生徒であるし、現在でもその状況は変わったとは言えない。アルバイトができない生徒もいる。また、学校幹旋の就職では、面接時にうまく自分をアピールできずに、社会への入り口の段階でまたしても

つまずいてしまう可能性の高い生徒である。自尊感情の育成がもっとも必要な生徒たちなのである。

こうした生徒は基本的な生活習慣や規律を守る姿勢は身につけているので、本校に入学して基礎基本を大切にすなわち、学習に対する自信を回復していく可能性がある。図書館や大型量販店に体験にでかけた二名の生徒については非常におとなしく、接客という仕事には抵抗があるのではないか（教師が生徒の可能性を否定してはいけないが）、周囲の私たちから見ても、大丈夫なのか自信をなくしはしないかと心配になるくらいである。でも先ほどのような感想を持って「苦手な分野だからこそ体験しよう」という具合に、自信をつけつつある。まさにトライ＆チェンジである。病院で体験を積んだSは、一年次に担任をしていた当時、放課後の教室清掃の後、中学校での自分の生活や入学してきて友達ができたことなどを話してくれた。話したというより「この学校に入学してきて良かった」と、一時間ほどしゃべりまくった。そのSは、感謝されたことにより、大変感動して帰ってきている。生徒はわずかな期間ではあるが、社会へ出て行き体験を積むなかで自分の居場所をそこに見つけてきたように思う。

八 二〇〇五年度の取り組みについて

当初、二〇〇四年度は校内体制の準備、二〇〇五年度は対外的な準備期間として捉え、実際の取り組みについては最終年度となる二〇〇六年度にと考えていたのだが、こうしたインターシップの経験から、（二〇〇五年度に二、三年になる）この生徒たちにもデュアルシステムの利益を享受する機会を与えるべきだとの機運がプロジェクトチーム内で高まり、二〇〇五年度からの実施について職員会議での合意を得た。

具体的には選択科目に学校設定科目「企業実習Ⅰ」（四単位）を設定し、新たにその他の科目との選択制を導入することによって、二年生は火曜日、三年生は水曜日に朝始業時から三時ごろまでの実習を行えるようにした。二〇〇五年度一年間で二十数回の実習になる。普通科高校の取り組みとあつて、実習先の企業・施設は、製造系だけでなく、販売系および福祉系というようにして受講生の希望を聞いた。この「企業実習Ⅰ」の受講生は、面接による選考を行い、学校として責任を持って企業や施設に送り出せる生徒に限った。面接官三人に生徒一人という重圧のなかで、主に動機や意欲に重点をおいて質問

した。

印象的だったのは、面接を終えた生徒たちが、おそろしく緊張から解放されたのであろうが、中庭で大きな声で面接の様子を報告しあっていたことと、同じく面接を終えて校長室に集まったプロジェクトチームの教師たちが明るい表情で、生徒たちと同様に面接の様子を情報交換する姿であった。われわれ教師の方もこの取り組みのなかで、自分の居場所を与えられているのだと感じた瞬間であった。

選考の結果、新三年生一名、新二年生六名の計七名の受講が決定した。企業・施設系の内訳は、製造系五名、販売系四名、福祉系八名である。実習先の企業・施設の开拓は予想以上に困難を極めたが、二月下旬には最終的に一七名の実習先を決定することができた。これも夏季のインターンシップで出会った地域の企業・施設の人々の献身的な協力によるところが大きい。

そして三月二四日、関係諸機関、保護者・生徒、実習先企業・施設が一堂に会して、「企業実習調印式」を挙行した。関係者には年度末の忙しい時期に出席してもらったが、こうした儀式の一つひとつが生徒の自尊感情の育成につながるのである。調印式で生徒に熱く語りかける企業・施設の人々の様子を見て、昨年四月以来進めて

きたこの取り組みがまた新たな一步を踏み出したことを実感した。

二三日間のインターンシップと通年で行うデュアルシステムとはかなり違い、デュアルシステムでは、その仕事独特のつらさや人間関係の難しさも体験しなければならぬかもしれない。しかし、その体験を通して、コミュニケーションスキルを育て、自分のあり方を学ぶことができるように思う。そうして社会へ巣立つて欲しいと思う。

こうした芽を大事に育て、社会のなかで自立できるように支援していく仕組みをつくるには、われわれにもまだまだ多くの経験が必要である。二〇〇五年度は、実際に企業実習に取り組むなかで、起こってくる様々な問題を整理・解決していき、布施北版デュアルシステムを確立していきたい。